

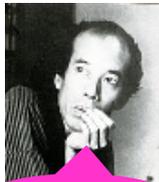
TZ 〈ほんの窓〉

第 42 号 (2016.11.7) 一橋大学附属図書館高本善四郎氏助成図書コーナー「本の紹介」班

(※詳細情報を http://www.lib.hit-u.ac.jp/pr/reading/tz/html/tz_042.html に掲載していますので併せてご参照ください。一橋大学附属図書館の請求記号を【 】内に記載しました。本学に未所蔵の資料も紹介していますが、公共図書館等で探してみてください。)

菊池・直木・芥川：知られざる文豪たちを読んでみる

このたび、80歳を迎えた如水会会員の皆様からの一橋大学後援会傘寿記念基金で「傘寿記念基金文庫」が寄贈されました。文庫のコンセプト「大先輩からの『本との出会い』という贈りもの」と、芥川賞・直木賞の受賞作品が揃っています。この機会に協賛して、



あんな痩せた河童に似てゐるなど心外であった (直木)

菊池寛 (1888年12月26日～1948年3月6日)
直木三十五 (1891年2月12日～1934年2月24日)
芥川龍之介 (1892年3月1日～1927年7月24日)
この3人の著作を紹介する小展示を実施します。

共通の事件・人物・題材を別の作品で併読することや、
翻案小説の原材料の探索もご案内します。



君に似てゐるなんて、不愉快だなあ (芥川)



(我鬼(芥川の俳号)画「水虎晚帰之図」)

1. 菊池寛 (きくち かん)

文藝春秋社の創業社長菊池は雑誌『文藝春秋』1934(昭和9)年4月号で連載「話の屑籠」に「親しい連中が、相次いで死んだ。身辺うたゝ荒涼たる思ひである。直木を記念するために、社で直木賞金と云ふやうなものを制定し、大衆文芸の新進作家に贈らうかと思つてゐる。それと同時に芥川賞金と云ふものを制定し、純文芸の新進作家に贈らうかと思つてゐる。これは、その賞金に依つて、亡友を記念すると云ふ意味よりも、芥川直木を失つた本誌の賑やかさに、亡友の名前を使はうと云ふのである。」と記し、翌1935(昭和10)年芥川賞・直木賞を創設しました。

菊池は長篇『真珠夫人』、短篇「恩讐の彼方に」(『恩讐の彼方に・忠直卿行状記 他8篇』(岩波文庫；緑63-1)【0800:32:B/198】)、戯曲「父帰る」(『父帰る・藤十郎の恋 菊池寛戯曲集』(岩波文庫；緑63-4)【0800:32:B/663】)をはじめ、幅広いジャンルで多数の著作を書きました。小説と戯曲とで自作のリメイクもしています。芥川龍之介は「小説の戯曲化」(1924)で「たとへば菊池は「義民甚兵衛」を小説から戯曲へ書直した」「ぬたになる筈のものをうつかり刺身につくつた」と評しました(『芥川龍之介全集』第11巻、岩波書店、1996、p.11-14よりp.13【9180:12:11】)。

創作の原材料のガイドブックに片山宏行『菊池寛のうしろ影』未知谷、2000【9100:2793】があります。



2. 直木三十五 (なおき さんじゅうご)

「風貌であるが、一見すると芥川龍之介に似ている」(山崎國紀『知られざる文豪直木三十五：病魔・借金・女性に苦しんだ「畸人」』ミネルヴァ書房、2014、p.19【9100:2611】)。直木自身は

「私の友人名簿」(1933)で「芥川龍之介氏と、私と、少し、どつか似た所があるやうである。芥川氏に云はせると、君に似てゐるなんて、不愉快だなあ、であるが、私に云はせても、あんな瘦せた河童に似てゐるなど心外であつた。」と書いています。

本名は植村宗一。「植」を二分して「直木」、当時三十一だったから筆名「直木三十一」、翌年三十二と一目上りに変えてきて、三十五で止めました。

借金に屈せず(直木三十五(1926)「甘い晦日」『日本近代随筆選』3「思い出の扉」岩波書店、2016(岩波文庫；緑203-3), p. 58-63【0800:32:B/651】)。

命日の呼称「南国忌」は、幕末の薩摩藩の「お由羅騒動」を題材とする長篇『南国太平記』(1931)に由来します。

歴史小説／時代小説を数多く書きました。史実や昔の制度・風俗習慣の予備知識なしに読むと、誰が何をしたと書いてあるのやら、ストーリーも納得了解し難いかもしれません。けれども、有名な事件や人物が直木自身または他の著者の別の作品や講談で共有されている場合があります。史料を駆使したノンフィクション、荒唐無稽に誇張した法螺話、名前や設定の食い違い別伝承などを様々なバリエーションで併せて読めば、どこかで聞いたことのあるような話、芝居や時代劇の記憶とも相俟って、触媒や酵素のように機能して消化も援けます。比喩的に言えば、畑に生えている食材をナマのまま調味料もなしに丸かじりする代わりに、薬味やスパイスを利かせると、単品で読んだときとは俄然違った味になるようなものです。

序文「仇討に就いて」の付いた短篇集『仇討十種』(1924)で単行書デビュー。初期には「直木と言えば、まず〈仇討もの〉というのが通り相場であった」(日高昭二『菊池寛を読む』岩波書店、2003(岩波セミナーブックス；88), p. 64【0800:6:88】)。

長篇『仇討浄瑠璃坂』(『明治大正文学全集』第59巻、春陽堂、1931, p. 285-564【202:16:59】)は宇都宮藩の元藩士が徒党を組んでの討ち入りで、赤穂事件に先立つこと約30年。柳生新陰流免許皆伝の剣豪荒木又右衛門が助太刀した鍵屋の辻の決闘(直木三十五「鍵屋の辻」『物語の饗宴』学芸書林、1969(全集・現代文学の発見；第16巻), p. 203-215【9180:21:16】)と合わせて江戸の三大仇討とも称されます。短篇「寛永武道鑑」「伊賀の水月」や長篇「荒木又右衛門」を併せ読んだり、忠臣蔵なら、直木の「大野九郎兵衛の思想」「寺坂吉右衛門の逃亡」、芥川の「或日の大石内蔵助」、菊池の「吉良上野の立場」等も読み比べができます。

3. 芥川龍之介(あくたがわ りゅうのすけ)

国語の教科書に掲載される機会も多く(佐藤雅彦編『教科書に載った小説』ポプラ社、2008【9100:2100】)、日本人の大多数は子どものころから芥川の童話や短篇小説を複数読んでいるはず(『トロッコ・鼻』講談社、1985(少年少女日本文学館；第6巻)【9180:11:6】)。長篇は書けません。古今東西の文芸作品を材源として利用しています。単一の先行作品を単純に翻案するのではなく、複数の素材を緻密に組み合わせる技巧が独創的です。たとえば「藪の中」(1922)の原作の『今昔物語集』巻第29「妻を具して丹波國に行きたる男、大江山に於いて縛られし語」第23には、関係者の証言が互いに食い違い真相が不明という慣用句のモチーフはありません。

北村薫(1992)『六の宮の姫君』東京創元社、1999(創元推理文庫)【9100:2789】は芥川が同時代の作家・批評家たちと相互に評し評されて次の作品の創造動機へ連鎖していく交流関係(菊池寛『半自叙伝・無名作家の日記 他四篇』岩波書店、2008(岩波文庫；緑63-3)【0800:32:B/575】)を考察した小説で、源流を遡って仏教説話集『沙石集』や西洋の類話をも視野に入れています。

